

---

月 刊

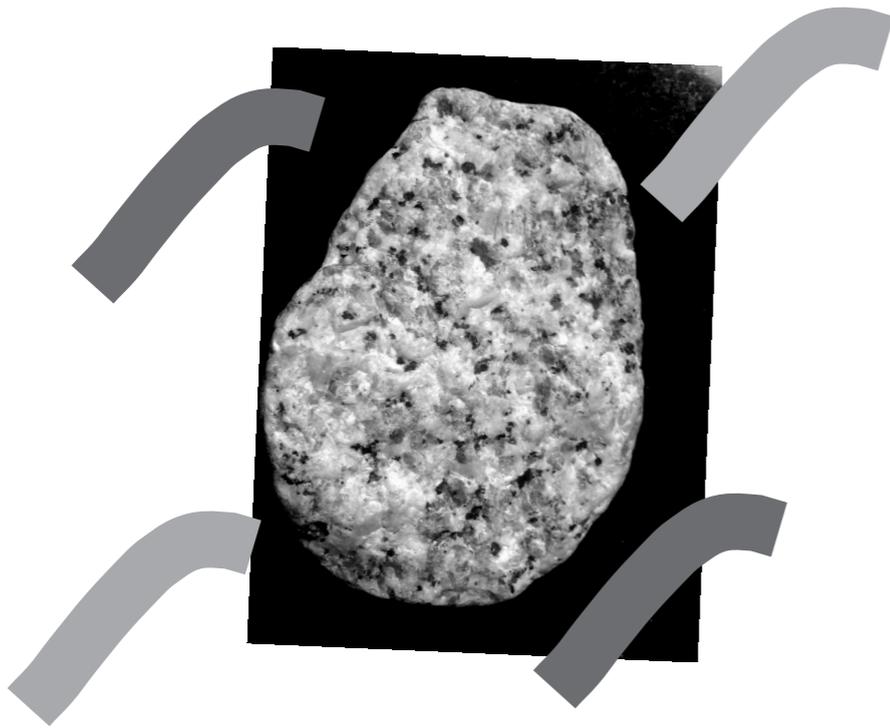
---

# MéLange

---

Vol.104

---



---

2015.07.26

寺岡良信追悼特集

---

月刊「MéLange」

Vol.104 2015.07.26

「月刊のさくら」編集部

### 寺岡良信追悼特集

追悼句(俳句).....大橋愛由等	12
弔句 十句(俳句).....高橋雅城	12
埠頭を歩く(短歌).....北村虻曳	12
今宵もまた一追悼 詩人・寺岡良信君.....キム・リバク (金里博)	13
壁の中で眠る.....黒田ナオ	14
芍薬の花が咲いた後.....御着かおり	14
眠ってしまった寺岡さんへ.....吉田ふみゑ	15
病室に.....にしもとめぐみ	15
悼む／乾季.....高木富子	16-17
採譜.....上野 都	17
風の白鳥／「亀裂」への浸透.....有時秀記	18-19
戻らぬ日に(メール交信の一部).....増田まさみ	20
出航を見送って.....千田草介	20
寺岡良信さんを悼んで.....堀本 吟	21
〈処女といふ寂しき刑よローレライ〉寺岡良信の句に寄せて.....岩脇リーベル豊美	21
言葉が死んだ、のか〜寺岡良信さんに捧げるソネット〜／アイロニーとアイロン.....大西隆志	22
VOICE—寺岡良信さん追悼.....今野和代	23
馬が逝ける.....高谷和幸	24
無言歌.....富 哲世	25
ドビュッシーの音楽から立ちのぼる和音のような詩が書きたい／涙い波、ヴォカリーズ.....福田知子	26-27
◇寺岡良信略歴.....	14

### 詩 & 俳句

夏の夜の夢 二十句 (俳句).....高橋雅城	04
聞こえない朗唱の中で.....野口 裕	05
清潔なゴリラ.....黒田ナオ	06
槌.....中嶋康雄	07
胡蝶.....月村 香	08
まどう溶液.....大橋愛由等	09
風が吹いて.....富 哲世	10

### 連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評 〈7〉.....富 哲世	03
神戸詞あしび 93 「朋を見送り映像詩学に酔い京都に向かう」.....大橋愛由等	28

編集部だより★25／「月刊めらんじゅ」104号は、6月27日(土)に逝去されました詩友・寺岡良信氏の追悼特集といたしました。作品を募ったところ多くの作品が集まりました。故人がいかに生前愛されていたかを物語るものです。6月30日の葬儀が終わり関係者で食事会をしている時、富哲世氏が、「寺岡氏が亡くなったことで、「Mélange」黄金時代の第一期が終わったと思っています」と挨拶したのが印象に残っています。まさにその通りでしょう。／今回の読書は、高谷和幸氏に語ってもらいます。テーマは、「失語と脳医学と詩学と」。山鳥重著『言葉と脳と心』（講談社現代新書）を参考文献に語る予定です。〈大橋記〉

## 富 哲 世

### ひと言詩評 7

ぼくらの愛は沈黙だ！という詩句を、読んだ気がする。生死を越えるものを、人は求めている。しかしそれはこの生かされている現実を少しも離れているものではないのだ。

たとえば、上野都訳 尹東柱詩集『空と風と星と詩』（2015年7月コールサック社）

#### もう一つの故里

故郷へ帰ってきた日の夜  
僕の白骨が伴をして ひとつ 部屋に横たわった。

暗い部屋は宇宙へと通じ  
空からか歌のような風が吹いて来る。

暗闇の中で深く風化して朽ちゆく  
白い骨を覗い

涙するのは僕が泣いているのか  
白骨なのか

志操高い犬は  
夜通し闇に吠え立てる。

暗闇に吠える犬は  
僕を追っているのだろうか。

行こう 行こう  
追われる人のように  
白骨にも知られないよう  
もう一つの美しい故里へ行こう。

(1941・9)

1941年の日付のあるこの詩。果てしなさに触れようと伸ばした腕の、死を越える切実な憧憬の確かさを感じる。

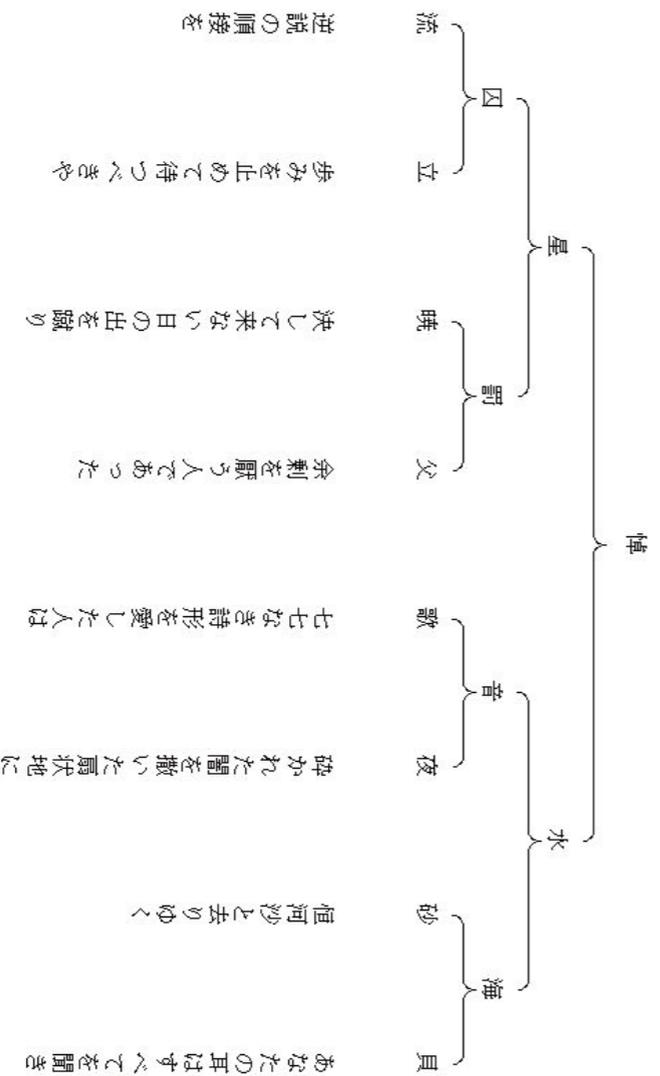
「一葉に立つ風にも／わたしは心を痛めた」（「序詩」と言い、「僕の歌はむしろ／寂しい木霊」（「山峡の午後」と歌う詩人が目に留めるのは、「井戸の中には月が照り 雲が流れ 空が広がり／薄青い風が吹き 秋が映り 追憶のように男がいます。」（「自画像」）や、「山林の黒い波動のうえから／闇は幼い胸を踏みこむ」（「山林」）、遠くへ黄土を乗せたこの地の春風が／胡人の糸引き車のように吹きすぎ／斑に彩られた四月の陽ざしが／壁を背にした切ない心ごとく触れる。（「陽だまり」）、「熱情のポプラは／近寄ろうとする蒼空の青い胸を／撫でようと腕を伸ばし揺れつづけた」（「蒼空」）など心象と一体化した自然と命の風景であり、それが居所の定まらない青春の傷みと悲しみを、民衆の生きる姿への共感を、悲憤を抑えたりリズムとして語っている。

強行採決に至った安倍政権下の安保法制改変や沖縄抑圧のきな臭い現在に呼応するしずかな怒りのように、詩人上野都のくつきりと冴えた日本語の訳出が、27歳で獄死させられたこの詩人の謂わば永遠の若さに共鳴する。  
「わたしはこの闇で命をささかり、この闇で成長し、今なおこの闇に生存するかのようだ。今わたしは、行くべきところが分からず、もがいている。（「流れ星の墜ちるところ」と書いているが、死を目前にした牢獄のなかでも、尹東柱はこのことばを幾度も噛み締めていたのではないだろうか。わたしたちはそれを、無念さとして受け継ぐべきなのだ。」

# ◆夏の夜の夢

高橋雅城

片蔭が東京現代美術館  
 駆け落ちをしよう真夏の月がない  
 この町にこの人がいて梅雨明ける  
 藪枯らし恩師が統合失調症  
 リスカする少女ダリアの花腐る  
 いもうとはポンポンダリアあんぽんたん  
 若妻とラジオオラスの午後すごす  
 ヤマガキのWソフトに梅雨晴間  
 妖精の散らばる夏至の夜のころに  
 人生という文字あおく夏至の夜  
 万緑の仁義アンパンマンが泣く  
 万緑の義理人情に叔父は逝く  
 蟹を食うひとつもあるのだ焦臭し  
 午後あたりうっふん水ようかん笑顔  
 雷鳴の鎮まる先へ人を訪ふ  
 夕風や水煙草なき町に居り  
 己の背も痒きは丹波太郎かな  
 ゆく夏や詩人ロルカの虫歯膿む  
 今日明日に変わらぬ気象ゆきのした  
 どうしても変わらぬ気持ち夏蓬



# ◆聞こえない朗唱の中で

野口裕

## ◆清潔なゴリラ

黒田ナオ

テレビに映る  
緑深いジャングル  
一匹のゴリラが  
健康的な白い歯で  
わしゃわしゃわしゃと  
葉っぱをかじっている

団地の部屋で  
わたしはひとり  
胸をはだけ  
生まれたばかりの赤ん坊に  
なま暖かい乳を飲ませていた  
するとその時  
テレビの中からゴリラが言った  
しっかりと  
わたしの方を向いて

ココニ イタノカ

赤ん坊は乳を飲みながら  
こくりこくりと眠りはじめる

キミハ ココニ イタノカ

ゴリラはよく響く低い声で  
もう一度  
はつきりとそう言った

部屋中にひろがる  
清潔な葉っぱの匂い

## ◆樋

中嶋康雄

樋は詰まったまま  
ただ乾いている  
雨は降らない  
強弱する日照りだけ  
よくないものが涌いている  
それでも  
なにかが始まるだろうか  
始まったからといって  
変わるだろうか  
戯れるよくないものは  
なにかにも吸着し  
しつこくしつこくつきまとう  
よくないものだけが

よくないものだけを呼び寄せて  
しつこくしつこくつきまとう  
むりやりにこそげ落として  
踏みにじる  
踏みにじられたよくないものは  
少し笑って  
また強くなる

ざらざらの彼方に  
なにかもを置き去り  
あるがままに放置する  
やつと慣れれば  
ほつとする間もなく  
次の樋が追いつがる

## ◆胡蝶

月村香

その日はこんなに暑くはなかったわたしはパンとワインとチーズをいつものように貪っていたわたしがこんなに生きるのに欲求する中胡蝶は何度もはらやひらやとわたしの目に映ったそのたびに祈ったどうぞおひとりでないようにとそれだけを悔やまれていたから映画の結末のようにおわたああの死とこの生がそうやってはつきりとまっ二つに切断されることそれをわたしはまた学んだその頃オレンジ色の液体を出して落ちて固まるが拭くと油のようになる小さい虫がわたしの寝室で流行った何だろう同じ頃空からわたしの頭めがけて落ちてくる大粒の液体状のものが幾度も流行ったわたしははずれにしても身を清めなければならぬと感じたこの歳にもなると一日太陽にあたっただけで熱中症になるぞと亭主に言われるもういつまでも時間はないんだぞともどんな思いであなたの方は全うされたかおかえりなさいと言えないことだけがわかつてる時代を超えてしまわれたのですねとその日一番の空の気をのみ深くはらう

## ◆まどう溶液

大橋愛由等

コップを握りしめ  
そこにラインが入っていたら  
錯誤の溶液が  
少しずつ石化している  
ということ――  
そこから  
まどいながら  
いつの間にか夕刻になって  
悔悟が  
透過をともない  
ぼくの第三胸ポケットを  
目指そうと  
こちらを じつと  
うかがっているのは  
じゆうぶんに知って  
いるつもりでも  
そのむこうに  
詩劇が見える窓からの  
実相を  
リアリズムとして  
受肉する

だれかの  
過誤が要る

コップが  
攪拌器に  
様変わりして  
日日草の  
笑顔を ほとんど  
奪ってしまったのを  
見届けていた――  
そのあとで  
窓から旅立った  
雨そぼ降る日の  
失誤は  
あまたの  
未発送の郵便を  
窓際に残したまま  
「美しくあれ」の  
誤訳を赦そうとせず  
無調の  
寸胴な  
忌諱なる  
二個一の連なりを  
ぼくに  
突きつけ  
にがみを  
刻印していった

## ◆風が吹いて

富 哲世

風が吹いて  
きょうわたしはもう見ることのない  
どんな夢を見ただろうか  
夕暮れの隔たりを通して  
夜の鼓笛隊がまた聴こえる  
天使の到着のあとの  
眼差しをすずしくはずして  
穴のような  
真つ暗な花の咲く  
庭の片隅に宿る遠いささやきに  
耳当てている  
水平線の間近にであう  
煽るような  
空と波との戯れを測りながら  
歌でしかない怒りと  
引き潮のやさしさに

漏れ打つ水音を数えている  
熱い烙印  
闇の胸  
星座は微笑みのように  
樹間に充ちているよ  
どんな光の下を  
ぼくらは歩いていたのか  
やあ、もう問う者はいません  
失くしものをみつけた  
あの夏はもう

# 寺岡良信 追悼特集

## ◇渇水期

寺岡良信

もうどこへも行けないなら  
黎明の廃園に  
おまへは涸れるのを待て  
月光に召されるもの  
それは薔薇の告白  
死は青々と  
エウリダイケの指の反りに凝結する



6月1日に見舞いに行った時の寺岡良信氏。  
10日の誕生日を前もって祝うためにケーキを持参した。

「GNOSIS」2号(エディションクロノス)2009.11より転載

◇ 弔句 十句

高橋雅城

◇ 追悼句  
大橋愛由等

潮鳴りに孤舟は遙か權残す  
嗚咽して青に染まりて水無月に

◇ 埠頭を歩く

北村虻曳

訃報ありひっくり返る茄子のへた  
訃報聞く囁るきゆうりがさくさくと  
蟻の列いぎなえ塚のその遠く  
永久に甘酒わたしそこねては  
永遠の今のみ残るごきぶりよ  
生も死も未だ知りえず土用入  
片蔭で全共闘は大嫌い  
蟻地獄孤独地獄や生地獄  
亡き人に願いの糸を結いたくも  
沈黙を守る死者へと終戦日

港湾の倉庫の隅の割れ鏡 闇と光の  
破線を折りつ  
人氣なき待合室の天井に思念も溶け  
て光がゆらぐ  
視野覆うにごりいよいよ増えきたり  
負ふことありし友逝くごとに

◇ 今宵もまた

― 追悼 詩人・寺岡良信君

キム・リバク (金里博)

ちよつとキザだったよ  
だけど、頑な君が僕は好きだった  
大きな船の帆柱が遙かの水平線の向こうで  
消えるように  
君が大航海に出かけたとき少しは信じてみた  
けれど  
僕はやっぱり思いたくない  
まだまだ、これからもずっと  
君は僕の心の中にいるから―

「言う」にはまだまだ  
「行く」にもまだじゃないか！  
「あなたの見送りは僕がする」  
はっつ、  
空手形で終えて  
気持ちが良いか？  
不渡りなんて全然格好良く無いよ  
僕は君よりも七歳も老いてるんだよ？  
生意気も良いところだ  
まだまだの青二才が！  
うん、だが  
君のあの日本語  
中々いけてるけど  
(僕は外人だから日本語は良くわからない  
が)  
正しい発音の出来ない旧仮名遣いなど

思い出す  
強くない酒と「カルメン」が好きで  
(いや、あの彼女が目的で入り浸りだったの  
かも…)  
弱いくせに入り浸りで時間を潰していた  
僕なんか一度も「カルメン」で君とは飲んだ  
ことが無いが  
京都市内の「一人無言」デモの最終日  
「鮎人」と伴走の数人で、ピヤホールで打ち  
上げビールを飲んだとき  
君の  
静かな弁と  
温かい激励と  
熱い友愛は  
肌着は汗でジクジクだったが  
爽やかだった

どうだ  
少しは悔しいか？  
それとも書きたいものは書き尽くしたと宣  
言するか？  
どつちに転んでも  
歳をとつたら素晴らしい詩がかけるなんて  
君は思うはずは無い  
だが  
やはり君にはもう少し  
そう、あと二十年を生きてくれたなら  
君はきつと  
もつと良い詩を書くだらう、と確信する  
今宵も  
僕は一人  
二つのジョッキを並べ各々こぼれるほど  
に注ぎ  
君のジョッキに僕のジョッキをカチン  
と当て  
「乾杯！」と大声を上げる  
僕が酔いつぶれるまで  
(生身の君がいらないからその分も僕が飲む  
ので)  
君が飲み干すジョッキが空になったとき  
僕は、すでに酔った君と肩寄せ合って眠る  
 친구여(友よ)―

◇壁の中で眠る

黒田ナオ

海の底の匂い  
深海魚の夢  
耳を傾けて聴くのは  
錆びた水道管のうねる音

君のいない  
ひとりぼっちの夜は  
冷えた壁に埋もれて  
白い夢を見る

溶けていく躰の想い  
地球の丸みを抱いて  
研ぎ澄ます  
壁の中に沈む  
壁の中で溶ける

◇芍薬の花が咲いた後

御着かおり

2階の北の窓からみる  
竹が大きく揺れて  
「おいでおいで」  
風が呼んでいるのかな？

部屋の扇風機は止まっているけれど  
無人の階下では回っている音がする

この竹は黒いから上等なんだ  
と長靴を掃いた人は言つて  
ドミソドファラシレソ  
豪華な社宅から  
ピアノが鳴る  
赤ちゃんを抱いている女の人は門の前に立  
つていた  
まるで閉じ込められたように

「それつて寂しくないですか?!」  
と笑つて言つてる人が悲しくひきつり

家の皺みみたいな階段は  
襖を開けると突然に現れ  
せまくて  
急で  
奈落のように

◇眠つてしまった  
寺岡さんへ

吉田ふみる

寺岡さんが歌曲の沙羅を歌ってくださいっ  
たのは亡くなる一年前のこと  
深山に沙羅の花が咲いていた

沙羅 信時 潔

林、音なく  
日の暮は  
ゆめのごとし

眞玉<sup>またま</sup>夕つゆ  
おもくして  
沙羅の花ちる

さゝら  
沙羅の花  
ほの黄色<sup>きいろ</sup>なる

寺岡さんの歌声は細いテノール  
歌い終わると

真つ黒だ  
頼りなく

「おいおい」と鸚鵡は呼んでいる  
芍薬の花が咲いた後

寺岡良信 略歴

一九四六年(昭和24)／神戸市に生まれる。  
一九五〇年(昭和32)／神戸市立真陽小学校(長田区)に入  
学。五七年に同・大黒小学校に転校。  
一九六二年(昭和37)／同・大田中学校に入学。  
一九六五年(昭和40)／兵庫県立長田高校に入学。高校時  
代に西脇順三郎、立原道造に強く魅せられ、詩に関心  
を抱く。  
一九六九年(昭和44)／立命館大学文学部史学科日本史専  
攻に入学。  
一九七三年(昭和48)／兵庫県立鈴蘭台高校に社会科教諭  
として赴任。  
一九七八年(昭和53)／西宮市立西宮高校に転任。二〇〇  
〇年(平成12)同校を退職。  
一九九五年(平成7)／『美しい拋物線のために』(かもが  
わ出版)  
二〇〇〇年(平成12)／立命館大学大学院文学研究科日本  
文学専攻に入学。二〇〇二年(平成14)同博士課程前期  
過程を修了  
二〇〇二年(平成14)／金蘭千里高校に地歴科・社会科の  
非常勤講師として赴任。二〇一三年(平成24)退職。  
二〇〇六年(平成18)／詩集『ヴォカリーズ』(まろうど社)  
二〇〇九年(平成21)／詩集『焚刑』(まろうど社)『せ  
せまくて』(まろうど社)  
二〇一一年(平成23)／詩集『凱歌』(まろうど社)  
二〇一四年(平成26)／詩集『龜裂』(まろうど社)  
二〇一五年(平成27)六月二七日 永眠。

◇病室にて

にしもとめぐみ

未だ若いあなたは  
死を待つ人でした

私たちはみんな笑つて  
楽しそうに話をしました  
そして  
あなたを囲んで記念写真まで撮ったのです

明るく清潔な病室で  
梅雨晴れの六月

疲れたあなたはベッドに横たわり

その足の指先の爪が  
繊細に薄く  
少し伸びていたことが気になっていたので  
した

さようならと手を振る  
あなたの笑顔が暖かくて  
一足先に遠いところへと歩んでいらしたよ  
うでした

## ◇ 悼む

高木富子

六月

二十七日、土曜日、午後二時十八分 寺岡良信氏死去享年六十六歳  
「腸捻転を発した時点で精密検査を受けていたらと悔やみませんが、遅かったのです。大腸癌は肝臓や肺に転移して抗がん剤治療も限界に達して余命宣告されてから早や一年余り、医者はあと一カ月くらいいの命、と。」

「死ぬのは怖くはありませんよ」とも語っていた。様々なことを整理して、いつ旅立つてもサラサラした気持ち、そんな雰囲気も漂っていた。が、周囲の表面的な感想に過ぎない筈。そうですかと受け止められない。どれ程の渦巻く思いや葛藤があったことだろう。人を蔑まない優しき、同時に常に彼に纏わりついていた寂しき。

誕生日は六月。一日に病院を訪れた時、六月生まれだからと大橋さんが買われたケーキを皆で食べた。病院で誕生日のケーキを食べたことが今では奇妙不思議に思える。

長年の友人TAMも六月生まれで、二年前六月二十六日に自死した。六十七歳の誕生日から半月だった。

二人とも神戸の生まれ。大学は京都に、それ以外は神戸から遠く離れたことはなかった。符号のように相似する二人が私の前から去ってしまった。先に逝くよと告げられたかのように。

先立ち、そしてあの世で会えるか？何もない、何もない、終わるだけだとわたしは呟く。姿を見ることももうない、嗚呼。

無力に揺さぶられる。

悲しみを押し寄せる波

わたしの嘆くメールに友人が古の歌を送ってくれた。

生きて死ぬこと、生きて死なれること・・・。  
後撰和歌集より  
「程もなく誰も後れぬ世なれどもとまるは行くを悲しみとぞみる」  
「別れにしほほどははてともおもほえず恋しきことのかぎりなければ」

七月

朝、ドビュッシーの曲、前奏曲の一つを聴く。  
「ドビュッシーについて語りたいですね」と寺岡さんは言っていた。その機会はこなかったけれど、もし話し合ったらたちどころにわたしの無知は明らかになつたことだろう。ドビュッシーの『月の光』の曲が大好きだと言ったのがきっかけで、折しも生涯に関する本をわたしが読んだ直後で、何となく自然に話が弾んだが、本の受け売りの類を述べていた自分が恥ずかしく思い出される。

わたしの音楽に関する知識など無いに等しいし、楽譜も読めない。一步も二歩も後ろに引いて、それでも時折軽く音楽について話していた。何より音楽は純粹に楽しみであり、喜びであるのだから。

今となつては悲しいが、それでもほんわり明るんでいる音がする。

そしてピアノの繊細な音が聞こえてくる。月光、ドビュッシーの曲もベートーベンの曲も酔わせる。

音楽好きな寺岡さんだが、ピアノを弾くことはなかった。歌とハーモニカ、オカリナを演奏するという「つましき、微笑ましき」がいつそ親しみやすかった。戦後のあの頃、ピアノがある家はとも限られていて遠い遠い憧れだった。学校でもオルガンがせいぜいだった。何か楽器を弾けたらいいと思うが、それは一生の不覚の一つで全く手が出ない。今からでも遅くないかもしれないが・・・。

人が去っていくのは寂しい。これが最期と自覚もしな

## ◇ 乾季

高木富子

あらゆる都市の絵地図の

その無限のリストの片隅に

人の生涯の最後の一行に

際やかに くつきり 収斂される

すべての変幻を終えて いっそうの さらなる幻が  
今やひっそり静まる乾季が

多面体の夜闇に退く

あなたは歩みを早めるだろう

その先にあなたは何を見出すだろう

やがて溢れ満ちてくるものを迎えて

突き詰めたら 躊躇と諦めではないでしょうか  
そう語られ驚く

が、胸衝かれる思い、ではなかった

羞恥に瑕疵

胚珠のように つねに待機し

穿ち得たものはあつたらうか きれぎれとしても

既にそれは変形して 流れ去ったかもしれない

捨て去ってきたものを 追いかけているかもしれない

冷ゆる両の手 あなたは答えない  
冷ゆる両の眼 あなたは語らない

## ◇ 採譜

上野都

どの耳が

どの道を通り

その場所へ行きつくのか

深く閉じられた夜空の  
億光年の星明りを探りながら

薄い鼓膜に掬い採る音

言葉でありながら

言葉でない

だが 五線紙のうえに置き換えられた約束

は

音符と呼ばれて収まり

道をゆくひとの標(しるべ)となり

いで三宮駅で分かれたTAM。最期とおもいつつ、いや、まだあと一度は会えるはずと思ひ、それが最期になつてしまつた寺岡氏。悔やまれ悔やまれてならない。ホスピスのベッドがまだ空かないのでと六人部屋にいた寺岡さん、病院の廊下での後姿が最期だった。ホスピスの個室に移つてから二週間後の死だった。

徒然草26段 「風もふきあへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、あはれと聞きし言の葉、ことに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、なき人の別れよりもまさりて悲しきものなれ。」

兼好法師は人の心変わり離れていくことを死者との別れよりいっそう悲しいと言うが・・・。生者の心変わりに感じる怒り失望幻滅も込めての悲哀、死者との永訣に感じる悲哀、いずれがより深く痛ましいだろうか？永訣、取り返しのつかない、その決定的な取り返しのつかなさ、わたしは嘆く。

大きな虚ろをまた一つ内部に抱える。

一瞬のうちに通り抜け それは混乱と幻滅だった一種の覚醒と新たな決意に繋がるものだったら、幸せだっただろうが。

寺岡さんとは学生時代の重なる部分において、たとい言葉が発しなくても理解できた。通奏低音のように絶えず流れているものを互いに聞き取れた。充足できない通奏低音だった。実年齢では年上でもわたしはいつも慰められ励まされていた。

一点の曇りもなしに・翳りもなしに生きたいと韓国の詩人は書いたが・・・曇りなく翳りなく生きることは不可能だろう。錯覚ないしは自己欺瞞を意味する、少なくともわたしにとつては。未だ充足を知らず足掻いているのだろうか？

過ちを繰り返すしかないとしても、それでも曇りもなしに、翳りもなしに生きたいと願う。

寺岡さん、ありがとう、ありがとう。

散り光る河の水になり

かりそめの歲月へ積みゆき

繰り返してきたようできて  
ただ一度きり

それでも 収められたものは  
立ち上がり 伏し

潜り 浮かび  
漂い 昇り

ひとを越えて ひとへ戻つて来よう

歌うことも  
弾くことも

ただ一度きり

約束は果たされるたびに掻き消え  
消え残つたものだけが ひとになり

探り 掬い 採るひとの  
細い指が契る熱い言葉

やわらかに降る星明りを肩さきに光らせ  
歌うひとは立ちつづけ  
弾くひとは立ちつづけ

消え残つた約束  
濃い影を映す ひと。

## ◇ 風の白鳥

### 有時秀記

大いなる鳥の影わが面を過ぐ。

(サン＝ジョン・ペルス)

小窓を開け、広がる宇宙に身を踊らすのは、知りえない彼方への飛翔願望の現われか。その飛翔は、しかし、まなこを閉じてのちにしか実現できない。小窓が見えるのは、あなたとわたしが目目のちであり、まなこの窪みの下に開ける異次元への奇妙な夢の回路の、その果てに小窓が穿たれている。夢の回路は宇宙への自在な往還の通路であり、永い愁いの糸を引きずっている。花飾りのある小窓はその宇宙への出入り口である。

過ぎ去りし或る日に、深い憂愁が瞑目をいざない、夢の回路に二つの旅立つ影があったのは、確かである。愁いは永く、深く続き、夢の回路には涙の河が流れていた。

そのとき以来、あなたはあなたを失った。わたしはあなたを喪った。わたしも過ぎ去ったわたしを失った。そして、やがて来るわたし

しを失うだろう。失われたものは、時と名づけられるものだが、単に失われた時でないことは言うまでもない。あなたの身体は涙の河を漂流して身を溶かし、一瞬のうちに自らの過去のすべてを想起する。想起ののちの自己喪失が渡河である。花の小窓から飛び立つ渡河である。心の痕跡を純粹言語のかたちに残して、存在の断絶と灰の沈黙を残して、影は飛び去った。

小窓の向こうの無限界に一陣の宇宙風が鳥のような白い影をみせるのは、断絶ののちに見せるあなたの形か。その白い鳥影を幻のような宇宙霊の使者と誰が名付けたのか。

わたしもまた、夢の回路を愁いとともて漂流し、心と名付けられるひとつのものを多様なかたちに溶かしつづける。その心の溶解に花びらの散乱が呼応して、多様に溶ける心の花びらとなって、小窓から飛翔するだろう。

ただししかし、いまだに失われていないわたしは、夢の回路の果てで、たゆたい、立ちどまり、夢中夢に陥る。残夢のような過ぎ去りし時が想起され、歴史と系譜の走馬灯が回る。失われた時を記憶の淵から、救い出すた

めに。

走馬灯には想起される幾多の棘が映され、心像は回転し、針の屋根で足が踊る。棘はサボテンの棘のようでもあれば、針ねずみのような棘でもある。空の上から見た針葉樹のような棘でもあり、病者の神経の棘でもある。踊りながら、強い痛みを伴う棘そのものがわたしである。棘の上で踊る棘のわたし。その棘の上で、傷は増え、痛みのあまり、さまざまな旋律に合わせながらも、舞踏する原身体が戦慄する。舞踏の原身体は白い骸のように見えるが、その存在の、戦慄する白さのため、たちまちのうちに崇高な生成の瞬間へ立ち上がる。棘の上で踊る身体がわたしであったのか。あるいは崇高への炎のような身体の白さがわたしであったのか。それともそれは既に飛び立ったあなたの痕跡なのか。

崇高な生成の瞬間、その瞬間に小窓の花飾りがわたしを取り巻き、宇宙塵が舞いこむ。そうして、あらかじめ、わたしは白い鳥影になるだろう。鳥影は宇宙風に運ばれ、ダークマターともおぼしい宇宙霊が、あるいは宇宙霊ともおぼしいダークマターが、わたしとあなたの白い鳥影の新たな歴史と系譜を司るだろう。

## ◇ 「亀裂」への浸透

### 有時秀記

高原に最期の秋が来たから払暁には寂しい霧が亀裂に滲み入るだらう——寺岡良信『亀裂』

小窓無限とも想える闇のなかで、見えない糸のもつれは、複雑でもつれにもつれて、ねじれる。そのため、そのもつれて、ねじれた糸を解きほぐすために、「近い魂」、「私」、そして「かの人」が、それぞれ異なるところから、泡をまといながら、早暁に立ち現われる。泡はそれぞれ深淵の影をひきずりながら、無限とも見まごう闇をかるうじて脱し、薄明に居場所を定める。

「近い魂」が宿る身体には、死病が付きまとう。「私」に近い魂であるにもかかわらず、死病のために、銀河と星座への詩的夢想を救いとして、あるいは崇高な音楽を友として、旅立つしかないのだろうか。かくて、「近い魂」は諦めのなかで、憂愁にとらわれ、かつ微笑みながら薄明の断崖に立つ。その断崖の彼方は限りない蒼空であるが、悔恨と希望を持ち続けて過ぎ去った時間は亀裂をもたらし、遍歴の痕跡もまた亀裂をもたらず。「近い魂」は亀裂の中に浸透して、かくも永く、かくも避けがたい深い愁いが亀裂の裂け目を埋め尽くす。そうして早暁を潜り抜け、最期の午睡ののち、死病の身体はとうとう永遠の眠りにつく。亀裂のなかに滲み入る愁いと、愁いがもたらず望みを残して。

そのとき、愁いにいざなわれた「かの人」は無の底から断崖の頂きまで、まばたきのうちに移動する。まといつく泡をふり切ると、「かの人」は断崖にうがたれた

亀裂に息を吹きかけ「近い魂」に無底の命を与える。

「私」は、遙かな過去から流れる憂愁の、静かな波に襲われながらも、「近い魂」に共振しつづける。すでに、「私」は「近い魂」と近しくなる遙かな前から断崖の上にとたずんでいるが、「かの人」はいまだに「私」に眼差しを向けることがない。断崖に屹立する樹木には、風にたなびく枝葉が幽霊のようになびいているが、いつしか幽霊が枝葉のようになびいている。それは過ぎ去りし時にこの樹上で縊死したアンドロイドの亡霊であり、「私」が愛したアンドロイドであるがゆえに、死ぬことがないにもかかわらず、縊死を果たした亡き骸の、風紋のような、たなびきである。

「かの人」が立ち現われた場所は、底なし沼のように感じられる深い海の底、あるいは無の底、無底の深淵のような薄明かりの泡宇宙である。「深海で水が動くとき、そこに陽射しが差し込むだろうか。深淵に命の光が届くだろうか」。そのような問いを、いくたびか反芻し、「かの人」は光明の瞬間を待ち望む。底なし沼のようなその場所で、容易にぬぐい切れない泡をふり切りながら。

いつぼう、世の人の言葉は真実を欠き、亀裂からはじきだされ、空を切る。背理を含んだり顔には、背を見せ離れるのが賢明だと、深淵に届くであろう光の源からの波動が「私」を励ます。そして、信が伴うのは、そのような光の波動の常であり、信と光は一体である。

銀河に向けて、詩的な言葉を爪びき続けた病者の志向は、白鳥座の意匠を垣間見させ、病者の言葉の指し示す彼方には、比類ない美が、遙かに浮かぶ銀河を流れる。その銀河への入り口が亀裂であるから、空を切る言葉を吐きつづける世人には、亀裂への参入は不可能であるだろう。ただただ空言を吐きつづける舌をすて

なければ。

幻聴のように、「かの人」の歌声が泡宇宙の泡にのって踊る。「舌は散る、ばらばらに散る。雨しぐれのなかの桜のように散りつづく。花びらは舞い上がる。月を超えて舞い上がる。天の川銀河へ舞い上がる。アンドロメダ座、カシオペア座、ケンタウルス座へと舞い飛び、オリオン、ペルセウス、ヘルクレス、ケフェウスまで舞い飛ぶ」。

亀裂から旅立った「近い魂」が、「かの人」によって吹き込まれた命の息吹きによって、「私」を泡宇宙へと導く。世の人から遙かな場へ遠ざかり、「私」は泡宇宙の泡を糧に呼吸しながら、「かの人」からの命の息吹きを待ちつづける。断崖に立つ樹木に枝葉のようにたなびく亡霊の形はやがて泡宇宙にも流れ、「私」の回りにも幽霊のたなびきが、とりかこむ。「かの人」は泡宇宙で「私」を迎え、とうとう「私」に吹きかける。花の命のような息吹きを吹きかける。

「かの人」のひと吹きは尽きることはない揚力で、「私」を浮遊させ、「私」は泡宇宙の一角に安らう。安らって見れば回りは、あまりに巨大な泡宇宙であり、すでに憂愁とともに亀裂に滲み入った「近い魂」は、膨張する泡宇宙のただなかにある。

泡宇宙の中心にいと想える「かの人」は、無底の深淵で、光っている。その光が「私」の瞳に届いたのは、泡宇宙のただなかで見た夢のなかであるが、その夢には「近い魂」も夢中夢で安らい、宇宙の泡に浮かぶ「近い魂」は光るつづける。永遠に光り、かがやいている。

(平成二十七年六月二十七日詩人寺岡良信氏が永遠に旅立ち、同三十日に葬送したのちに、その死を悼み作詩する)

## ◇戻らぬ日に(メール交信の一部)

増田まさみ

寺岡さんは死んだらあかん。今から更にホンマの詩を書ける人です。

(2014・4・08)

てらおかさん、ありがとう。夕方『龜裂』届きました。

(2014・4・08)

返事など、要らないと言ったでしょ。身体を治すことが第一です。「俳句」や「詩」の話を出来る日を待っています。

(2014・4・22)

それは、表層のことばなどでは埋まらない内質的な感性だと思います。

(2014・4・29)

いま、『龜裂』を読んできました。繰り返して読んでいますが、「読んだ」と言うには覚束なくて…。私自身茫漠と漂っています。多分そこに寺岡さんの「詩」が成り立っているのですね。(後日『龜裂』への感想送る)

(2014・5・08)

「この人は本当に詩を書く稀なる詩人だとピリツと感じた。静かにみつめている」と、『龜裂』を見せた友人(詩)から今デンワがありました。「どこにそう感じたの心」と聞く、「頭に入っている」との事でした。む

(2014・5・09)

『めらんじゅ』に掲載の寺岡さんの文章を読み、この筆力と内実に安心を覚えました。

(2015・02・01)

寺岡さんの「詩人の魂」は不滅です。最後まで諦めないでね。

(2014・4・26)

辛いですね。お返しする言葉が見つかりません。ただ、ただ、祈ります。いま、詩を書けなくても寺岡さんの「詩人の魂」は不滅です。

(2015・5・26)

寺岡さんは死んだらあかん人でした。

(2014・5・27)

## ◇出航を見送って

千田草介

寺岡さんには神戸がよく似合う。世界の海にむかつてひらけた街。彼はここからどこへ行ってしまう、わたしたちはその残像を追っている。

ひとりで行くのは寂しい、という声が残響している。

もう今では見られなくなった光景だが、埠頭から船が出るとき、色とりどりのおびただしい紙テープが、見送る人と見送られる人とを、つかの間つないだ。

その儂くちぎれてしまうテープをとおして何が去来したか。

子どものころ大人たちにつれられて一度だけ目にしたシーンが、なぜか重なるように眼裏によみがえってくる。

テープはもう切れてしまった。

生を完結して去った彼から新たにとどく言葉はない。

手もとに残った紙の切れ端を見つめる。

## ◇寺岡良信さんを悼んで

堀本吟

七月二十四日、宝塚市立病院に末期ガンで緩和病棟に入っている寺岡さんを見舞った。私と虻曳と息子の荘太と一家でいった。これがお逢いできる最後かとも思いつつごく普通の歓談、しかし、合間に「この夏保つかなあ」と言われるので、「大丈夫もう一度来るわよ」と私は言った。二日後に逝去された。そのことがかえってやりきれない。

寺岡さんは四冊の詩集を持つが、俳句の定形への関心も強かった。

霧の村石を放らば父母散らん 金子兜太

酔っぱらうと、この句を朗誦した。「霧の村」と「父母」とは、私の受け留め方では極私性とミニマムな社会性の根幹にふれているはずだ、寺岡さんはいっしょに石を投げながら日々の時間の中のものもつてくる複雑な思いを散らしたのだろう。詩や俳句の形で追求していたものがなにか、ということが、この句の偏愛ぶりからなんとなくうかがわれる。

彼には内面につよい規範精神があったように思う。その感情の正義に因って生きたのであろう。句がわかれば詩もわかるという濃厚な関連をもつて、二つの詩形を、どちらも可能なかぎり端正に書きわけている。下の句は、彼の存在の美学を吐露したののだろう。

竜骨に播られて浪の孤児となる 寺岡良信

一方、寺岡さんは、諧謔が好きでときどきふつと面白いことを言ってみたりを笑わせたから、そこから俳句本来の奥行に触れその世界の自由闊達さに憧れていたのだろうかとも思う。ともあれ、端正な俳句と欠かさぬ投句によって、北の句会を支えてくださったことをありがたく思う。

青よりも淡い雨かも水無月葬

海が好き 好きな人魚に檻被せて

平成27年7月17日

堀本 吟(北の句会)

## ◇〈処女といふ寂しき刑よローレライ〉

―寺岡良信の句に寄せて

岩脇リーベル豊美

国境を北へと向かう

男性名詞を戴く大河の右岸で

切り立つ岩壁には

木霊が宿る

時折

人の姿をした水の精が

歌声とも泣き声とも

区別のつかない音を連ねて

流木を魅了する

罪を受け

死を願うが叶えられず

父なる河に

身を投げるといふ設定は

視界をなくした船人の伝説

浄土に流れ込むのだろうか

呼びかけるのだが

木霊は沈黙の領域に入った

## ◇言葉が死んだ、のか

寺岡良信さんに捧げるソネット

大西隆志

消えた砂浜を  
言葉は歩いていた  
砂の感触を確かめ  
銀河のなかの一粒の潮

高架線の列車の通り過ぎる音は  
言葉には辛かった風景を纏いつかせる  
再開した鉄路は歪んでいた  
月光は切れた電線の硝子

山と海が洋灯の影を引つ張り出す  
言葉はトレモロの波に乗って  
空気を響かせることに夢中

寝床での旅は終わりに近づいている  
一緒に眠れないから權を手にして  
言葉は膨らむ地図で闇をひらく

## ◇VOICE

寺岡良信さん追悼

今野和代

水無月  
ざわーん  
ぞおわーんと潮さい  
嘆きの鳴き砂を  
優しくなだめて  
はまなすの匂いを吸った  
きみの揺れる淡い影が  
ゆつくり過ぎつていくと  
星座よりも遠い夏の  
しんかんとした空から  
青い吹き矢の光になって  
降りそそいでくるしじま  
わたしのみぞおちの底から  
半分引きちぎれた言葉が  
伸び縮みする水母みたいな  
悲鳴のツノを孕んで  
半眼の姿勢で  
やってくる

## ◆アイロニーとアイロン

大西隆志

知ってることを振り回しているつもり  
むやみに振り回すので  
あぶない、あやうい、あり得ない事柄の播粉木  
が  
ベースの上や、意外な基地にも風を切る  
情報はどこにでも転がっているが  
ベンチの奴に合わせるよ  
アイロン台にはフライパンとモデルガンがの  
っている  
日々の生活があやういので  
牛肉が高いから豚肉にしようか悩んだすえに  
自転車ではじめての道を通っている  
鹿肉あります、が右眼の端っこにあらわれ  
裸眼ではなく、ガラスを通して  
鹿が路地を横切った  
山林に棲みにくくなったからか  
マイクを手にした自警団が一瞬、帝国シャツ  
のしたに  
小さな播粉木を隠し持っている  
キャベツとモヤシと鹿肉炒め、何か違う  
冷蔵庫に残っているタッパに入っている野菜

きみが眼を閉じて  
ぼくの名を呼ぶと  
深い水底の水晶色の泡沫うまかたを抜けて  
きみのまぶたの裏を流れる  
夜明けのミルクの霧になる  
空虚な白昼夢につぶされる  
喧騒の街角では  
狂信的に点滅する  
道化師のシグナルになって  
きみを陽気なうてんき女に  
変身させる  
旅の途中 廃墟の円柱に凭れて  
迷子の心細さに溜息つくきみの頭上を  
おそろしい早さで飛ぶ燕の流線形に  
緑に燃えたつポプラに吹き渡る風  
蒼穹に浮遊するはぐれ雲にも  
茜に染まる空の傾きにも  
きみの歌にも外套にも  
不安にも歓喜にも  
瞬時にすばやく  
もぐりこんで  
ぼくは  
いる

それら時間を抱えた野菜に  
塩胡椒と播粉木でガリガリしたばかりの胡麻  
で

誤魔化しの野菜炒めか

言葉が軽い時代とはよくいうよ

政治家はヒトの言葉をペラペラにするのに悦  
びを感じ

軽いのはヒトの地勢の乱れ

シーツは皺だらけでも、あんたにはいわれた  
くないのよのアイコン

自らの発見によるアイロンがけが大事なので  
す

村上春樹さんの本の主人公はよくアイロンが  
けしていた

今は余裕がないのでアイロンがけしなくなっ  
たココロ

我慢の先には何がありますかね

熱い温度で均されて

ペラペラの熨斗烏賊になつてしまったぼく、  
ぼくらは

誰のつまみでしょうか

ウォー・ボードゲームの上で右往左往して  
あてもなく黙り込んでいるのかしら

子どもたちがモデルガンで狙っているのは  
じいじい、とばあーばあー

アイロンがなくなつた

ミシン台もない

綺麗な部屋には何もない

いるよ  
いつでも

記憶からしきりに

うらがえつてくるくらい午後

カルメンの椅子に沈むと

なつかしいきみの声が

もどつて来る

## ◇馬が駈ける

高谷和幸

馬が駈ける。ことばを切るなら風の表は裏だ。ひゅーいん、ひゅーいんと、空気の首のあたりを逆さにたぐると見えてくる3D映像のスクリーンのあのあたりに、馬の襟はどこにあったのだろうかという永遠の間ひが残る。風は死んだのか。駈け抜けた山々につつまれた河が水面から鏡の空に昇っているよ。ほら、馬よ。よこれる、走るたびによこれてしまう襟のよこれとはこのような水の循環の中でわたしたちの着衣に付着したくもりのようなものだろうか。夜はたんぽぽの部屋窓から背中を向けて、ひゅーいんと言え、ひゅーいんと答える者がいて、予定調和のしずけさよりも眠れないかなたで馬は襟のくぐもる鏡の四重奏にもだえていたのかもしれない。わたしたちの携帯電話は少しは安堵もし、今となれば来るものがわたしたちに聞かせたような、あの馬のことばの襟に、押し寄せてははけていく、あれは押韻のひづめが咳き込みながら自分の所在の在り処をつたえる小石のひすらぐ音だったのでないかと思う。今朝は高いところの音はその高さの極みでとどまる美を、低いところはその単音を繰り返したピアノの厳格さを、そのすべてを雑音にして、爆発音の矢を空に向けてソユーズがコウノトリを運んで行った。プロソディの星海に浮かぶ鳥影は陳腐ながらわたしたちの指の測定器を片隅に置くことになるだろう。あの日から遠く離れていったからもうひゅーいんはないが、切るならわたしたちのことばのひゅーいんだ。風の裏は表になって、駈け抜けた野から蕨がいつせいにめぶいていく季節の、食欲の痛みの恥ずかしさを押し黙って。指摘されずともわたしたちの襟がよこれているのは分かっていることだ。

## ◇無言歌

富哲世

転回とは、あるものの死を堪え忍びつつ、それをみずからうちに保持することであるかのようだ。そして新たな秘密の経験を開始し、秘儀を分かち合うこととしての責任の新たな構造を切り開こうとするとき、ひとがみずからのうちに保持するものは、埋め込まれた記憶であり、より古い秘密のクリプトなのだ。(ジャック・デリダ)

死はぼくらへのご褒美なんだって。右は責任の系譜学について述べたデリダの一節。それが暗合させてくれている死との出会い、それは死に常に先立たれたわたしたちのだけれども、試みようとするということもある。寺岡さん、いま尽きず、響り高く流れる小川の水のような、貴方の所望したというエンディングテーマ、バッハの無

伴奏チェロ組をかけています。チェロの音色はほんまに人の声のひびきやね。それは貴方が人を愛したという最後の証し、のようなものだろうか。

旅人かへらず、や寺岡さん。もしかしたらもうそつちで、美しい、悲しい詩をぼくらに遺してくれた詩人のひとりとして、貴方の好きな立原や三好や西脇順三郎せんせいらの談笑の輪のなかにいるのかもしれない。それとも新入りとしてバリトンの美声か、ハモニカやリコーダーでも披露してるのかなあ。

愛しいねえ。  
悔恨の衣裳を脱ぎ捨てた今、あなたの詩のなかには何がいたか。あなたが建てた海に向かう彫像の前で、それはそこから苦しみと、憧れのやつて来る、海につながる、星の開けにつながる、どこにでもいる、愛すべきわたしたち自身の無邪気な姿にほかなりません。

トウオネラの河水はあなたの詩のように、深く青く澄んでおりますか、あなたの白鳥は解き放たれて川面に舞い降り、美の羽をしづかに畳んで一期をやすらいでいます。わたしたちは結びの一行を空白に置いたまま、悠久の時と、あなたの終わらない詩に委ねることにいたします。

## ◇「ドビュッシーの音楽から立ちのぼる和音のような詩が書きたい」

福田知子

これは寺岡良信が処女詩集『ヴォカリーズ』のあとがきに書いた言葉。「ドビュッシーの『夜想曲』だったか『海』だったか、微細に変化してゆく色調と、古典的な調性から逸脱して波や風や幻の人魚の歌声をときに物憂くときに哀切に、清冽な官能性までもなつて譜面の奥の奥から浮かび上がらせる不思議な和声の虜になつた」とある。

「いままでの詩の抒情とは全く違う、洗いざらしたように美しい廃墟がまとうひかりの粒子のまばゆさ、立ち現れる風景や人物の具象を超えた澄明さにこころ魅かれた」と。

前者の文章を子細に見ていくと、音楽が醸し出す《色》も《音》の調子

も、正調でありながらそこから僅かにズレてゆく変調の過程にこそ、寺岡さんが見出した美があったのではなかったか。また、西脇の詩に関する後者の文章からも、「廃墟」や「具象を超えた澄明」などといったふうな僅かな破調のなかにこころ魅かれるその美があると。かすかなひかりや、風景や人々、それら自身のもつたたちの水域をわずかに超えたところに佇む幻——それら抽象化あるいは風化する一歩手前あるいは未生の美に、心が揺さぶられていたように思う。しかも、それらを寺岡さんは言葉自体の中から読みいだそうとしていた。

たとえば、上記ドビュッシーの文章での「譜面の奥の奥から浮かび上がらせる不思議な和声」とあるように、実際に譜面を手にしていることがわかる。寺岡さんは譜面が読めた。しかも初見でバッハの曲さえ、リコーダーやクロマチックハーモニカで吹いてくれたことを思い出す。

モノという具象が紡ぎだす抽象に至る未生の回路を伝つて謳いだされる言葉——ここにこそ、寺岡さんの詩の美学があったのではないか。古典への懐古ではなく、まさにそこに現代を生きる一人の詩人の言葉の発見や追究があった。

すでもう鬼籍に入られた寺岡さんの九年前の詩集『ヴォカリーズ』に記されたこれら「あとがき」の言葉に触れて、今さらのようにその言葉の繊細な重みの前に佇んでしまった。

## ◇ 溟い波、ヴォカリーズ

福田知子

ヴォカリーズ

《それは靈魂たちの国の言葉》

溟い波 囁き

抑制されたリズムをたよりに

海の皮膚をそつと撫でる

ただ薄い唇が動く

《蒼い重力がゆたかに歪曲する六月の涯》で

ヴォカリーズ

あなたはまだ聴いているだろうか

どこかでいまも聴いているだろうか

伝説は蘇らないまま

うすい光が温度を下げて

高山植物たちに返礼する 朝

あのころあなたは父の子どもだった

波に投身する父の

泡に溺れゆく父の

父という空洞をひたした月雫の

告解のフジ壺

少年は築いた

ぎりぎりのサンクチュアリ

ミルク色の液体が高い山の中腹から毀れ  
バイク音を響かせながら  
水曜日ごと  
明るい声が緑を弾いた

補陀落渡海記に聞き入った少年は

父の裳裾をひくように

両手両足をぴりぴりひろげ

自らに恥じ入るように歌う

よくとおる声で

こんなふう に

なぐきわらいして わがびえろく

なぐきわらいして わがびえろく

あぐきじゃ あぐきじゃ と

……………

このあとの歌詞

思い出せない

どうしても

《蒼い重力がゆたかに歪曲する六月の涯》

誕生月の睦月にあなたは逝った

降り続く雨の日には

白く煙る雨筋の向こうから

あの声が焼きついて

私の鼓膜を震わせる

うた  
神戸詞あしび

93-2015.07.26 大橋愛由等



マグリット「ヘーゲルの休日」  
コップとこうもり傘が生まれた

朋を見送り映像詩学  
に酔い京都に向かう

▼六・三〇／われらが詩友・寺岡良信氏の通夜と葬儀に参列。「死ぬことはこわくないのです」と生前に強く語っていたこともあり、旅立ちのありようも、寺岡さんらしく潔く、高い倫理性に裏付けられるものであった。

葬儀会場の「クレリ玉塚ホール」で、柩を乗せた車を見送る時、驚きが二つ。列席者への挨拶として霊柩車は短くクラクションを鳴らすものだが、それがなかった。かつその霊柩車の車体は白であるのも珍しかった。これでは霊柩車であることはわからない。クラクションにせよ、車体色にしろ、葬儀会場が、阪神間の住宅街の真ん中に位置するために、周辺住民に気遣っているのかもしれない。一カ月ほど前に、姫路市内を車で移動している時、宮型霊柩車を見かけた。姫路ではまだこの形がスタンダードなのだと言った。地域によって好みが別れることに興味を抱く。神戸市内では金メッキを施した派手な屋形タイプの宮型霊柩車を見かけなくなっただけを確認していた。

▼七・一二／衝撃的な映像詩学が展開されていた。アレクセイ・ユーリエヴィッチ・ゲルマン監督映画「神々のたそがれ」を観る。めくるめくスピードで進む物語。舞台である未来の地球以外の別惑星はなぜカルネッサンス以前のヨーロッパ中世を思わせる世界。そこには個の場所がなく、常に多くのひとびとが画面の中に「混住」しており、その猥雑さは極まっている。そして面白いのは、画面に介入してくる遮蔽物。さらには「カメラ目線」。登場人物がカメラを覗きこむ、といったメタ映像的な作り方。そして物語は全ては至近距離で起こるのだ。賢者たちはいとも簡単に殺され、首吊りの刑に処せられる。「今日は詩人を吊るしたい気分だなあ」といった執行官の台詞にどきまきしてしまふ。私がいままで観てきた映画とまったく異なる映像詩学で創られている。「惑星ソラリス」(アンドレイ・タルコフスキー監督、1972)を観たあとの衝撃にも似ている(どちらも、ソビエト・ロシア系映画であることを気付く)。

▼七・二一／ひよいと思ひ立ち美術鑑賞をする。京都市立美術館で開催されている「ループル展」と「マグリット展」を観に行く(同じ一つの美術館で開催されていて、移動の手間が省けた)。この二つの展覧会、みごとに客層が違っていた。「ループル」は中高年の教養主義的な鑑賞。「マグリット」は若者と美術・芸術系のひとたち中心だった。「ループル展」の目的はただひとつ。哲学者スピノザがモデルと言われているフェルメールの「天文学者」を見ること。まんじりと10分以上眺めていた。スピノザ哲学を思惟するときのために頭に焼き付けておこうという魂胆。「マグリット展」はじっくりと鑑賞した。やはり私には現代美術があっている。作品名のプレートに、マグリットが解説している短文もついていることもある。「ヘーゲルの休日」(写真上)が出来た経緯をマグリット自身が述べる文章などは、そっくりそのまま現代詩として読んでも可能な面白さ。こうした仕掛けもキュレーターたちの仕業なのかもしれない。

詩と評論  
月刊「Mélange」Vol.104  
神戸

2015年07月26日 通巻104号  
発行所/月刊「Mélange」編集部  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F  
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)  
maroad66454@gmail.com  
定価 600円(税込)